慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	佃島とその社会・ 文化的変化 : 東京都中央区佃島調査序説
Sub Title	Socio-cultural changes of Tsukudajima, a unique small community in old Tokyo
Author	佐原, 六郎(Sahara, Rokuro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1963
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.2 (1963.) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000002-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

KEIOGIJUKU LIBRARY
慶應義塾
圖書館
MITA SHIBA TOKYO JAPAN

佃島とその社会・文化的変化

―― 東京都中央区佃島調査序説 ――

Socio-Cultural Changes of Tsukudajima, a Unique Small Community in Old Tokyo

佐　原　六　郎

Rokuro Sahara

A. 東京都内特殊小地域社会解体の傾向

東京には昭和20年の終戦直後まで旧幕時代以来のいろいろな特殊小地域社会が残存していた。ここで特殊というのは，その住民が一種の同類意識によって結ばれ，周囲の社会とはちがった古い伝統，習慣，方言などを共有すること，また小社会というのは大都市の中に在りながら，それら住民の占める地域が比較的に狭く固定して，人口がある限度を越えて増加しがたいことによって特徴づけられる社会を意味する。このような社会は江戸から明治の時代にはもちろん，その後になってもかなり多く存在して，それぞれ特殊性を発揮していた。たとえば昭和になっても多少その遺風をとどめて存続していた旧大名華族とその周辺に住む旧藩士とより成る小地域社会では，もと城代家老，家令，家扶などの側近士族であったもの，またはその子孫がいて，旧藩主またはその相続者を殿様と呼び，郷里の習俗や方言をそのまま伝承していた。殿様を後援者とする著名な俳優や力士，御出入りの商人や職人なども正月や盆には御機嫌伺いに参上して殿様に敬意を表したりした。そこでは東京各地に散在する同郷人を集めて園遊会を催したり，郷里出身の在京学生のための寄宿舎を設けたりして相互扶助，親睦，育英などの実を挙げ，同類意識と御国自慢を助長していた。けれども終戦後天皇神格の否定と共に皇室の藩屏たる華族も廃止され，彼等が永く保持していた広大な屋敷は臨時財産税その他の理由で手離され，分譲され，また豪荘な邸宅や粋をこらした庭園も公共の施設や旅館，大料理屋などに転用されてしまった。旧大名華族がこのようにして斜陽化すると共にこの種小地域社会も全く解体して殆んど跡をとどめなくなった。これと同様の現象は江戸，明治を通じて久しく殷盛を誇った下町の問屋街や花街の如き特殊小地域社会にも認められる。それらが既に解体し，または解体しつつある原因はいろいろあるであろうが，教育の普及，徒弟制度と衣食住その他に関する身分的差別の撤廃，同業者の地域的分散，前近代的社会規範の弛緩，民主，平等思想の発達などが主要なものとして挙げられるであろう。

以上述べたように東京に永く残存していた特殊小地域社会の多くが既に解体したなかにあって，今なお多少とも旧態を残し，明治時代の様相を呈しているのは中央区佃島の小地域社会である。近来古き佃島情趣や風物の年々失われていくのを惜しみつつ懐古的感興をここに求める人が少くない。新聞，雑誌，ラジオ，テレビなども佃島の旧態とその変貌を伝えて世人の注目を引いている。そのうち，たとえば，Le Monde 記者 Robert Guillain の「佃島は遠い国である。銀座から佃島まで距離は短い。しかしながら別世界に移ってしまう。騒音と激動の巨大都市，東京と別れて，静まりかえった，おくゆかしい小さな独立国にはいる……」という表現はなかなか面白い。Guillain はこの寄稿[1]のうちで佃島とその住民とに心からなる愛着を示し，最近の帰仏（昭 37.12）に際してもわざわざ住吉神社の神主に手紙を送って同島遺風の失われざらんことを願っている程である。けれども内外多くの人々の愛惜するこの独立国の特殊性も激しい時勢の変化には抗しがたく，今や衰退の一途を辿っていると云わなければならない。

---

1) 朝日新聞，昭 36.10.22

佃島は古くから漁業，海運，商業その他諸方面で重要な役割を果してきた。島はまた其角や広重，永井荷風や木村荘八などをはじめ多くの文人墨客に親しまれて文学，絵画などによき題材を供してきた。けれども「東京広しといえど，すでに水流の上に橋が渡ってその木の欄干の影が水中にたゆたい映る，況やその橋の上を蛇の目の女姿が通るなどという清方えがく風景を見ることの出来るところは，偏したりといえど，佃島の佃小橋に行って見る他にそのときもう手がなかった」と述べて昭和29年のある日を回想した木村荘八[2] も32年 8 月には佃小橋がコンクリート造りのものに改架されているのをみて「既に東京には木の橋が――そこを汐の香のする川風が渡り，橋下からはすくすくと舟棹や網の先きが覗き，川岸にぼっくいで架けた，船虫のいるさんばしが並ぶという旧東京の風景は今日只今絶滅したということを一筆はっきりと書いておく」と断言したほどである。ところがそれどころではない。都心から月島，江東を結ぶ新道路建設計画が進渉し，既に明石町から佃島南岸に沿うて長さ 220 m，幅 25 m の佃新橋が昭和39年 3 月の完成を目指して架設されつつある現今，大川を渡船で横切り佃島の別天地に到着するあの悠長な気分や，人影の稀れな住吉神社の夕景などの情趣も失われて，都心から月島工場地帯や晴海埠頭へ往復疾走する無数自動車群の騒音と砂塵に悩まされる日の近いことを予期せざるを得ない。その場合には単に佃島の伝統的情趣や風物が過去の夢と化するばかりではなく，この島の住民と社会とのあらゆる面に大きな変化が生ずるに違いない。このように考えるならば昭和 39 年 3 月，すなわち佃新橋完成期日は佃島にとって一つの大きな転機となるはずである。私は，この研究に協力する同学の諸君と共に，その期日前及び後の佃島住民及びその社会の在り方を調査し，もって大都市内特殊小地域社会解体の諸相を観察し，その原因と結果とを究明しようと企図しているのである。

B.　佃島調査の目的と実施計画

中央区明石町から隅田川を距てて東岸に位するわずか 200 m² の佃島は正保元 (1644) 年から今日に至るまで 318 年にわたる歴史と伝統を誇る特殊小地域社会を成してきた。この島の歴史的諸事実については特に地元の区役所の綱さんした京橋区史 (昭 12) と中央区史 (昭 33) とにかなり綿密詳細な記事が載せられており，また文人，画家，好事家などの文章や絵画がよい参考資料を提供してくれている。そこで私達はそれら既存の資料はもちろん，新しく採集した文書その他を渉猟比較すると共に，事情の許す限り現地調査を多く試みて，この由緒ある佃島の社会，経済，文化の各方面にわたる綜合的研究を遂げたいと念願している。なお私達は数年来諏訪市南真志野の村落調査[3] を続行しているが，これと平行実施される佃島調査が両地域社会の比較を可能にし，そこに存する共通及び相異の諸点を明かになしうれば幸だと思っている。

(イ)　**調査目的**――この調査は佃島という大都市内特殊小地域社会の歴史と現状とを調べ，そこに現われる社会・文化的変化の様相と原因とを究明することを目的とする。

(ロ)　**調査員とその構成**――この調査に参加する研究者を歴史班と社会学班との二つに大別する。調査研究には主として慶大の大学院社会学研究科と文学部との史学及び社会学関係者が当る。しかもこれらの研究者は上述 2 班の何れか一方にのみ所属するというのではなく，都合により，また必要に応じて所属を越えた交互的協力をする。

(ハ)　**歴史班**――佃島小地域社会の起原，発達，変遷を経済史（漁業，魚市場，問屋，交通，貿易その他），文化史（宗教，祭礼，芸術，芸能，教育，風俗，慣習，行事，民家，仕事場，船舶その他），社会史（社会及び権力構造，婚姻，家族，マキ，氏子集団，講中，隣組，職業，身分，階層，社会規範その他）の三方面から研究するために古文書類をはじめ各種の資料を求め，できるだけ多く比較検討する。

(ニ)　**社会学班**――歴史班との緊密な連繋のもとに終戦後から今後10年に及ぶ佃島の実情を経済，文化，社会の 3 方面にわたって実地調査する。それにはまず住民の人口，年令，世帯，家族，職業，学歴，社会的規範などを調べ，それに基いて適当な質問項目を選定し，サンプリングによる予備調査を行う。次いでその結果妥当と判定された質問項目を含む質問紙を作り，個別的面接法による悉皆的本調査を実施する。他方また島の現状視察，行事その他の場合における参加観察などをもできるだけ頻繁に行って，この地域社会についての知見を広め，判断の公正を期する。

C.　佃　島　概　観

佃島は文禄 4 (1595) 年の絵地図を見てもわかるように向島と通称され，隅田川口に点在する干潟の一つに過ぎなかった。それが埋立てられて人間の住みうる人工島

2)　木村荘八，東京繁昌記 p. 97—8　昭 33　演劇出版社

3)　慶応義塾大学院社会学研究科紀要第 1 号にこの調査の中間報告が載せられている。

となり，佃島と呼ばれるに至ったのは正保元年のことである。それ以来今日に至るまでの歴史と現状については，いづれ歴史班及び社会学班による綿密な研究報告が行われると思うので，ここで詳述する必要はない。そこでこの調査研究を進めるに当って一応心得ていなければならないことだけを次に略記するにとどめて置く。

(1) 住吉神社の起原――昭和8年官幣大社住吉神社宮司副島知一の編さんした「住吉大神御鎮座地」によれば日本全国に存在する住吉神社とその摂社，末社を合せると2,139社の多きに及んでいる。このうちには朝鮮釜山の竜頭山神社も含まれているが，その分布は極めて広く，住吉神社（名称のちがっているものも多少ある）の所在なき府県は一つもない。それならばこのように広く全国に鎮座するに至った住吉大神はいつ，いかにして祭られるようになつたのであろうか。大阪市住吉区住吉町所在の住吉大社の社伝たる住吉神代記[4]によれば，神功皇后新羅親征のとき，表筒男命，中筒男命，底筒男命の3神が兵船を守護し，武運を守ったので，皇后は凱旋のみぎり神託に従ってこの地（現大社所在地ではないという説もある）に3神を奉斉したとのことである。これと同一の由緒は摂津西成郡田蓑村（後の佃村，現在は大阪市淀川区佃町となっている）の田蓑神社（住吉神社の処在地名）に於ても伝えられ，大江戸佃島住吉神社略縁起[5]及び住吉神社略縁起[6]にも書かれている。しかも西成郡の住吉神社は上述住吉神代記にもその所在が8カ所の他の住吉神社と共に挙げられているので，少くとも天平3(731)年に遡りうる極めて古い起原のものであることがわかる。何れにしてもこれらの住吉神社の祭神たる表，中，底の筒男の神は伊邪奈岐命の御子で，天照大神の兄神に当り，海洋神[7]，航海神，軍神，あるいは和歌の神などとして崇敬され今日でも全国住吉神社の祭神となっている。なおこの3神のほかに長足姫命（神功皇后）を加えて4神とし，更に東照宮その他を加えて祭る住吉神社もある。

(2) 佃という村名――天正年中（1573―91）徳川家康が摂津多田の神崎に参詣の折，神崎川（淀川の支流で今も佃町と大和田町の間を流れている）を渡る船がなくて困ったとき，田蓑村の名主見一（見市）孫右衛門なるものが配下の漁船を都合して家康渡河の奉仕をした。このとき以来この村は家康の命によって佃村[8]と呼ばれるようになったが，それは漁業の傍ら田をも作れとの思召に基いたものだという。

(3) 江戸の佃島と住吉神社――江戸佃島最初の住民が摂津佃村及び大和田村からの移住漁師30余人であったことは文献の上で証明されているが，漁師江戸下降の年月については天正年代説と慶長年代説とがあって未だ最後的結論に達していない。けれども宝暦年間（1751―64）に書かれた神主平岡日向守好信と名主忠兵衛との署名した文書（平岡家所蔵）には「往昔佃村より江戸へ下降せし漁師33人の名前別紙記載の通り」として宇右衛門以下32人の名が列記されている。そして「上条の年月等，右は確としたる証明すべきものなきも二，三記して参考に致し候」と述べ天正18年説1通，慶長17年説4通の文章の各1部を引用している。また佃島年代記[9]（仮題）の「佃島起立の事」には「台徳院殿依為江戸御在城漁師関東に可趣旨上意有之佃村之漁師廿七人，同国大和田村之漁師六人，都合卅三人，慶長十七年七月廿六日摂津発足，八月七日江戸着」と詳記されている。天正18(1590)年説と慶長17(1612)年説と何れが正しいかの問題[10]は歴史班今後の研究にまつことにするが，何れにしても江戸にきた漁師達は安藤対馬守，石川大隅守の邸内に暫く仮住し，やがて寛永年間（1624―44）に幕府から賜った鉄鉋洲向(向島）の干潟を埋立てて，正保元年，ここを永住の地と定め，故郷の名に因んで佃島と呼ぶに至ったのである。

他方30余名の漁師江戸下降の折，摂津佃村住吉神社神主平岡正大夫の弟，権大夫好次は住吉明神の分神霊を奉戴して江戸に来り，同じく対馬守及び大隅守など諸侯の邸内に分霊を奉祭した後，正保3(1646)年6月29日佃島に造営された社殿に，住吉3神，神功皇后及び徳川家康の霊の5座（5社大明神）を奉遷祭祀した。これが江戸佃島，同住吉神社の起原である。なお上記佃島年代記（中井写本 p. 9）には「正保三年丙戌，先達石川又四郎（八左衛門）殿屋敷内ニ営所之住吉之小社ヲ佃島ニ遷座

4) 住吉神代記，昭10，写真版巻物写本，宮地直一の解説書附属，この神代記は天平3年神主津守宿禰客人と津守嶋麿が神祇官に奉った社記で1,200有余年原本を伝えて今日に及ぶ。
5) 天保3年11月　平岡日向守藤原好貞記
6) 明治39年5月　平岡好文誌
7) 椿　実　住吉神代記の神観念，日本宗教学会編，宗教研究　第152号
8) 前掲　住吉神社略縁起
9) 原本無題，歴史班の中井信彦が，佃島年代記と仮題した。この文書は飯田栄太郎氏（佃伊之）が佃島の網元であった故細川源次郎氏から譲りうけて所蔵している。中井の作った写本は219ページある。
10) この問題については中央区史上巻 p 896 では慶長説に重きを置いている。

ス，社務漁師之内ニテ勤之」「慶安二年巳丑相改処ノ佃島家数八十軒，人数百六十余人，此時初テ江戸市中之格法ニ習テ作法ヲ定ト云」と書かれている。私は最近佃島の旧家，飯田栄太郎氏の紹介でもと網元であった故細川源次郎氏未亡人きみさん（現当主は一郎氏）に会い，同家所蔵の佃島絵図を見ることができた。この絵図は横54 cm，縦 89 cm のかなり大きな紙に佃島地主，家守の名，地所，道路，舟入堀などの縦横の間尺の数を明記したもので宝永 7 (1710) 年8月に丹波遠江守与力磯貝藤兵衛外2人の組与力が幕府に提出した絵図の控である。各地主所有地を無色とし，道路と橋を黄，海と川の水を濃淡の藍色，水中の葦の葉を濃淡の草色にそれぞれ彩色した美しいもので，保存も頗るよろしい。これと同じ絵図を私は今年4月に，有賀喜左衛門，中井信彦，宮家準，山岸健（何れも共同研究者）と一緒に金子為雄氏邸で拝見したが，それは佃島沽券図として京橋区史（上巻 p. 722）にも引用され複写されている有名なものである。幕府に提出された正式のもの以外に「御奉行御吟味に付差上候控」の絵図が金子家だけでなく細川家にも所蔵されていて，その両者をよく見ることのできたのは尚に幸であった。この図によって川の両岸にある渡船場，佃島内の鍛冶細工部屋，渡守小屋，自身番小屋，大工仮屋，大蔵などの存在した位置が判明し，また当時の住吉神社境内の広さも一目瞭然である。殊に道路の配置と福員がはっきりしているのでそれと現在の道路とを比較することができて頗るよい参考となる。なお面白いのは宇右衛門，平左衛門，清兵衛その他の地主または家守の名が明記してあること，そのうちには摂州から下降した漁師の名と全く同じものがかなり多いことである。これは恐らく宝永7年まで生存したもとの漁師または父祖の名を襲名した子孫なのであろう。更にこの絵図は沽券という言葉を具体的に表現している。〝沽券がさがる〟，〝沽券にかかわる〟というように人の品位とか，体面とかの意味では今でも使われているが，地所，屋敷などの所有を証する券（ケン）としての意味は今では余り通用しなくなってきた。ところがこの佃島絵図こそは土地，屋敷の所有権と，その売買価格，税金などを示した文字通りの沽券図なのである。この点江戸時代の不動産に関する事情を知る上からもこれは貴重な資料と云えると思う。

わが国全都府県に分布する大小さまざまな住吉神社の総本社ともいえるのは大阪市住吉区の大社である。この大社の初代神主狛氏については「神功皇后の命によって大神を奉祭神主職に任じ，且氏を命じて津守とした」という意味のことが社伝[11]に示されている。事実それ以後の神主はいずれも津守氏を称えていたが，はるか後世の江戸住吉神社神主のうちにもこの由緒ある氏を称えたものがある。例えば，江戸住吉社第6代神主好弘の署名した文書を見ると明かに津守好弘としてある。また佃島碑文[12]によれば「津守もとは平岡氏にして，即ち佃村神主の族なり，元禄の時御奉行の仰によりて今の氏に改む」とあるから，津守が佃村神主の氏であったこと，また元禄以来好弘の他界した寛政 8 (1796) 年まで江戸の神主もこの氏を称えていたことが判明した。なお大阪佃町の神主家たる平岡氏の系図はまだ調べていないし，また東京佃島神主平岡氏の系図を示す文書もまだ発見するに至っていない。けれども東京の平岡家には大正6年6月に第10代平岡好文が第8代好貞と第9代の好国の作った年代順霊神名を命日順に改めた過去帳様の巻物が現存している。それは蓋のない木箱の左右両端に軸をつけ，それを回転すれば巻物の紙が自然に平岡家祖先以来の家族員の命日を日附順に示すようにできた便利なものである。この巻物には正保 4 (1647) 年1月30日を命日とする平岡権大夫を初代とし，それ以後9代までの神主（第9代の大教正好国の命日は大正6年6月3日）及びその家族員の神霊名が死亡年月日と共に記入され，またそれら世襲的歴代神主の名，位階勲等なども示されている。神主家の人々のうちに法名の附記されたもののあるのは，主として他家から嫁入りしてきた夫人，または非相続人の場合で，神主となったものには法名はない。他方摂津佃村神主平岡正大夫の弟好次が分家して江戸佃島の初代神主となったことは現に平岡家所蔵の下記文書によって明かに知ることができる。「武州豊島郡佃島住吉大明神の儀は摂州西成郡佃村住吉大明神御分社にて神主も分家の儀に御座候へば，この後不寄何事，本家の思召次第に仕り，末世に至り候とも，背御意間敷候，若不埒の者出来候へば本家より相続可被成候，子々孫々に至候とも一言の子細申間敷候，本家相続人無之候節は分家より相続可成候，この度立会にて印形仕候　　一札如件

武州豊島郡佃島住吉神主　　平岡日向　印

寛政八辰年三月

右の通立会相極置候につき致印形候　以上

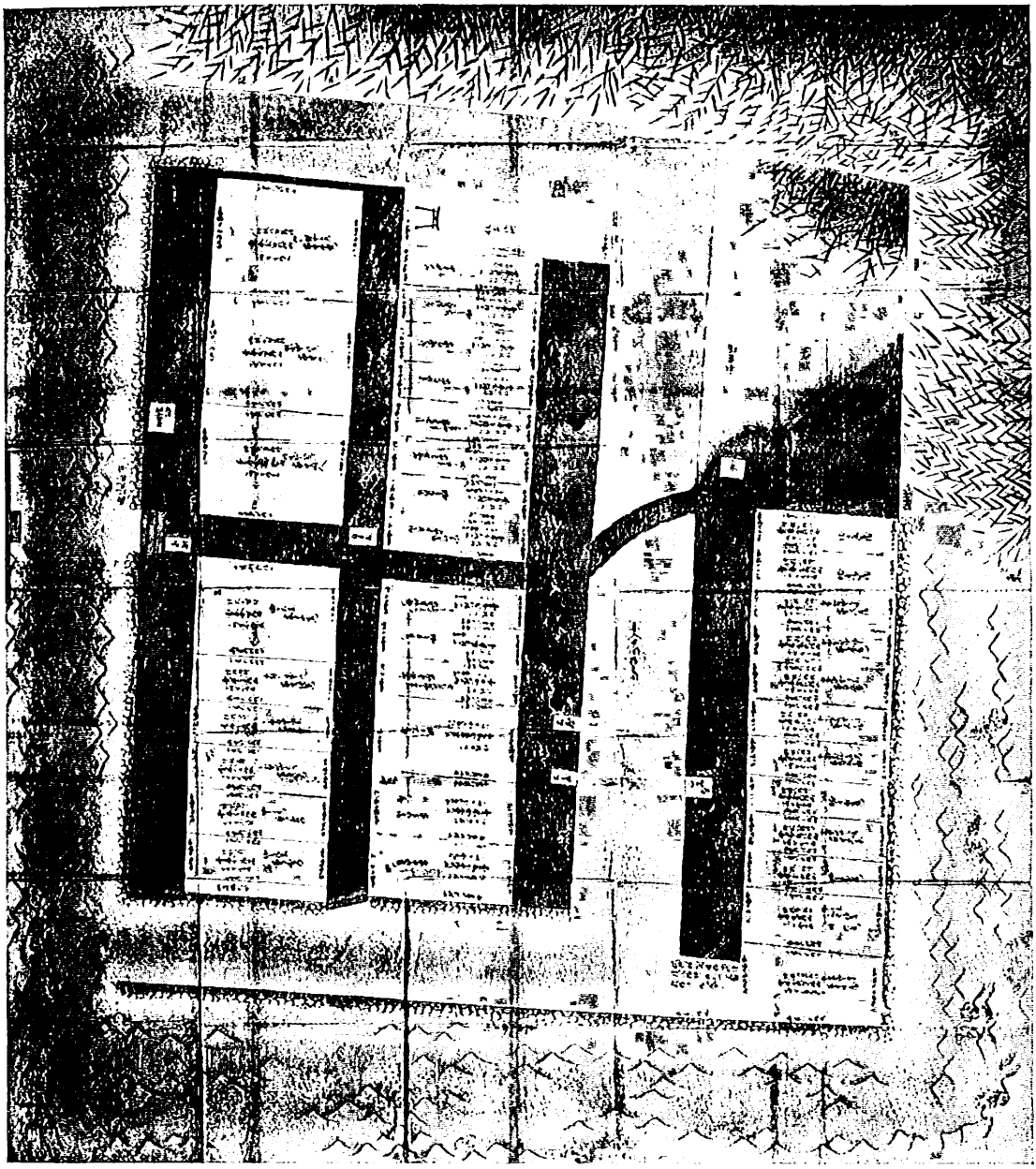
摂州西成郡佃村大和田村兼帯両社神主

辰年3月6日　　平岡讃岐　印

---

11) 曾根研三　中世住吉大社の信仰動態　神道宗教学会編，神道宗教　第28号

12) 平沢五介撰　佃島碑文并和解　寛政2年，写本，平岡家所蔵



伽島絵（沽券）図　宝永 7 年（細川一郎氏所蔵）

（各区画内記載事項の 1 例——表幅中間 12 間，裏幅中間 12 間，北裏行 20 間，南裏行 20 間，坪数 240 坪，売券金 120 両，小間＝付 10匁，摂州伽村地主九左衛門，家守平左衛門）

父　平岡権大夫　印」

この文書の年月は寛政 8 (1796) 年3月6日となって居り，また前述の平岡家過去帳様の巻物でこの年月に該当する平岡日向を求めれば寛政10年4月19日に逝去した第5代神主日向守好昌であることが判明する。他方本家側捺印者は平岡正大夫の何代目かの当主讃岐守とその父権大夫とではないかと推定される。しかもこの文書は東西両社の神主が何々の守という身分であったこと，彼等の本家分家関係及び相続の問題が示されていること，また，当時佃村と大和田村（今は何れも町となっている）にそれぞれ住吉神社があって，平岡讃岐守がその兼帯神主であったことなど，注意すべき事実を語っている。

(4)　佃島の漁業――摂津西成郡田蓑村の庄屋見一孫右衛門はその数代以前から漁業に従事し，多くの漁船を所有する顔役であった。既述のように徳川家康が神崎川の岸まできて当惑したとき漁船を出して渡川の便宜を計ったのはこの孫右衛門である。その労を多とした家康は庄屋の宅に赴き，邸内に立つ三本の老松を見て森の姓を孫右衛門に与えた。爾来孫右衛門とその子孫は森氏を称えるようになった。孫右衛門はその後江戸に下降したが佃島埋立完了後本国に帰り，弟忠兵衛を佃島の名主とした。そこで忠兵衛は佃姓を名のり，その後6代目名主に至るまでは何れも佃忠兵衛を襲名し，7代目からは再び森姓に復して森幸右衛門と称えた。さて忠兵衛を中心として漁業にいそしんだ佃島漁師達は先に江戸に下降後間もなく下された「於江戸近辺之海川魚猟免許之御墨付」[13]（慶長18年）を利用して大に活躍し，将軍家に対しては白魚御用，御遊覧網などで奉仕した。もちろん彼等の生業にはかなり激しい盛衰もあったが，ともかく明治，大正に至るまで佃島と云えば「色白のやつは佃のなまけもの」の川柳に表現されたように漁師の天下であり，彼等は摂津以来先祖代々同じ生業を守る一大家族をなすの観があった。なお佃島漁師とそれ以外の地に住む漁師との間には漁場，漁猟権などについての抗争もあり，裁判沙汰もあった。またこの種の問題に関する文書の遺存するものは決して少くないがここではその問題は省略する。さて上述のように昔から久しく漁師の天下で，神主，鍋鍛冶，薪炭問屋，つき米屋など少数のものを除き，他の職業者の殆ど住んでいなかった佃島も明治中期以来月島や新佃島の埋立が進み，周囲の事情が変化するにつれて住民の職業も多様化し，いつのまにか色白の奴の多い普通の町と化してきた。殊に隅田川及び近海の不漁は徹底的な打撃を与え，漁師の数も年々減少しつつある。しかも彼等の営む漁業も殆ど皆海苔の採培を主とするものであって，名ばかりの漁業としか云えなくなってきた。

佃島の漁師と日本橋魚市場との間には深い因縁がある。その点に関する文献は他にもいろいろあるが，ここでは坂本二三郎著日本橋魚市場沿革紀要[14] 上巻を参照して概略を述べることにする。既述の如く徳川氏開国の際，摂津佃村名主森孫右衛門は佃，大和田両村の漁師30余名を率いて江戸に入り，各所の河海で漁業を営む許可を得，佃島漁師活躍の端緒を開いた。やがて漁師達は幕府の膳所に供した魚類の残余を市街で販売したが，年々同業を営むものが増加し，従て売却の途も広盛したので，慶長の頃に至り森九右衛門[15] 等は幕府に納めた魚類の残余を引受けてこれを販売するための便益を計り，売場を日本橋本小田原町に開設した。以後府下の繁盛が加わるにつれて遠近の河海からも魚物を運送し来り，売買が益々盛になったので本小田原町，本船町，河岸を合せて市場を開くに至った。かくて魚商人は各自戸板を設け魚類を陳ねて販売しはじめた。その後河岸通りに納屋を設け，また納屋前の詆（河岸通りは5尺の詆，横通りは3尺の詆を設ける規定があった），板流しを作り，また後には魚商各自が市場に居住を占めるに至った。

以上は日本橋魚市場の起源であるが，漁師と魚商人との分化した事情もこれによって了解される。後年に至って魚市場は「溌剌たる江戸気分の尖端を行くものとして生彩を発揮し，江戸における魚類の最大市場となったが，創設当初漁師達を団結せしめ，漁獲物を市場で売る常設的組織を結成したのは佃島の漁師たちであった」[16] と云われるようになった。しかも漁師から魚商または魚仲買に転化した人の多くは摂津から江戸に下降した漁師の子孫であり，そのため魚市場で佃屋とか大和田屋など，故郷に因んだ屋号を称えるものも少くなかった。このことは昭和37年4月に私達が点検した天保時代の魚市場納屋絵巻[17] に描かれた魚問屋の納屋配置図を見ても明瞭である。また試に私は現在の魚市場で佃の字のつい

13) 前掲佃島年代記 p. 4

14) この書は上中下の3巻より成り明治23年に出版された。ここでは大正2年1月発行の徳川時代商業叢書第1，p. 378—449 にまとめられたものを参照する。

15) 九右衛門は森孫右衛門の長男，九左衛門はその次男で本小田原町組看問屋を経営したと前記沿革史に伝えているが，九右衛門よりは九左衛門を以て魚市場の創始者と見なすようである。

16) 月島発展史　京橋月島新聞社編，昭 15. p. 62

17) 金子為雄氏所蔵

た屋号をもつ魚仲買の例[18]を調べたが佃藤，佃平徳，佃重，佃新亀，佃伊之，佃久，佃半その他23を数えることができた。もちろんこのうちには現在佃島住民でない人，また佃島との関係の極めて薄い人もあるであろう。また浜長，丸国，原政などの屋号をもつ佃島在住の有力な魚仲買も少くない。何れにしても磯亭永理の描いた江戸日本橋本小田原町肴市場之図に示された繁華な情景を憶い，また大正12年の震災後築地に移転して益々発展した中央市場の盛況を考えるとき300余年前に佃屋九左衛門等の開いた魚市場以来の歴史が偲ばれてまことに興味深いものがある。

(5)　住吉神社と諸問屋――佃島では近来モルタル塗り2階建の家がふえて明治以来の古い家がだんだん見られなくなってきた。恐らく旧網元の細川氏の家などはかなり古い建物であろう。けれどもこの島で最古の建物としてはまず住吉明神の社殿を挙げるべきである。佃島は幸に関東大震災にも，また昭和の大戦災にも火難をまぬかれて明治の旧態を比較的によく残しているが，維新以前には民家も社殿も幾度か火災に遇い，そのため100年を越える建物は全く見られない。住吉の社殿は類焼の都度，篤信の崇敬者や氏子の協力によって再建された。例えば天保 6 年 5 月の「佃島住吉御社再建仕法書」[19]を見ると平岡日向守，世話人白木彦太郎，藤木次兵衛及び十組の金助の連名で社殿再建のための募金が行われている。そして宝暦，文化，文政にも再建されたことが記載してある。しかし現存社殿は慶応 2 (1866) 年の江戸大火による類焼後，明治 3 (1870) 年に再建されたものである。このような社殿造営に連関して忘れ得ないのは元禄 7 (1694) 年，はじめて塗物店組，釘店組，綿店組，酒店組その他を含む十組問屋の規定を作り，続いて十三店組を成立させた川上正吉（通称大阪屋伊兵衛）のことである。川上が江戸経済史上注目すべき十組問屋の制度を作り，また住吉講を結んで商売の発展を計ったばかりでなく，住吉明神の熱心な崇敬者であったことは佃島住吉祠碑[20]に刻まれた碑文に照らしてみても明かである。寛政 3 (1791) 年に甲斐権守加茂県主季麿の書いたこの碑文によると，川上は往きこう船の混乱するを嘆き，その商売にたずさわる商人を十組に分け，往来の船の混乱しないようにと万世変らない掟を定め，また海上の暴風，疫々の災難のないようにと，正保の頃，氏子達と謀り，金を集めて新に社殿を造営し，規模を改めた。そのためこの神社は終に古蹟の一つに数えられるに至り，今の世に及ぶまで霊験あらたかに，万船のゆききの安らけく，四時の祭のおこたらないのは全く正吉の功によるというのである。かくてこの碑は正吉の功を永久に伝え，十組の人々の弥栄を祈り，かつこの事の起りを忘れないために建立されたとしてある。

佃島住吉神社はその成立及び発展において常に漁業と深い関係をもっていたが，また他の一面から見ると廻船の航海安全を祈願する商人の崇敬をも受け，魚問屋その他の漁業関係団体だけでなく菱垣廻船問屋との関係も浅くなかった。今は全く廃品として境内神楽殿横の一隅に放置されている古く錆びた半壊の円筒形用心水釜（高さ 0.787 m，口径 0.909 m）を見ると「御宝前，天保十年五月，大阪菱垣廻船問屋，顕屋清三郎」の鋳形文字がはっきりと読める。これこそは同じく住吉社御宝前に奉納された江戸菱垣廻船問屋，利倉屋金三郎の大水釜と一対をなして拝殿正面の左右に置かれた鉄製用心釜の片破れである。文久 3 (1863) 年 3 月の佃島住吉神社境内絵図面[21]にはこの一対の置かれた位置が明示されているし，また「菱垣廻船問屋奉納物控，天保十亥年」には両用水釜の絵図が墨の線画で記録されている。これらの用水釜は何れも神社と廻船問屋との浅くない関係を物語る証拠品と見ることができる。更に平岡家所蔵の廻文控（嘉永五子年三月改之）には「口上，愈御壮健被成御座候重に奉存候，就ては例年の通当廿三日朝四ツ時より渡海安全，為御家内繁栄に万人講御神楽致執行候間，乍御苦労晴雨共御参詣被下様御組内様に宜敷御披露希候　以上　平岡日向守，世話人　白木屋彦太良，藤木喜兵衛」という口上書の文案を示し，白子組，内通両組，塗物問屋，油問屋，住吉組，新堀組，紙問屋，蠟問屋その他25の問屋または組を宛名として書きつらねてある。同様の廻文控は安政4年のものも遺存しているが，何れも住吉社と問屋との結びつきを示すよき資料と思われる。なお現在の境内には水屋内の「天保十二年白子組献納」と刻まれた石造手水鉢をはじめ，明治時代の畳問屋が奉納した石柵，東京肥料問屋の大石灯篭一対，太物店中の石造御神灯一対，陶器仲間中の石造鳥居，昭和の魚市場佃組合の木造御神灯一対，東京油問屋市場役員一同の松樹一植，東京鰹節類卸売商業協同組合及び株式会社東京鰹節取引所の

18) 水神祭　佐久間仙一郎編，魚がし会発行，昭 31. p. 99 ff.

19) 平岡家所蔵，この文書の木版刷りには重政画，佃島風景の版画が第 1 ページを飾っている，

20) この石碑は現存しないが，その拓本は平岡家にある。

21) 平岡家所蔵

石碑（鰹塚）などがあって商人と神社との結びつきを示している。殊に面白いのは魚市場佃島仲買一同の献じた藤棚である。これは「遠藤は亀戸，近藤は佃なり」とか「佃島松の代りに藤を植え」などと詠まれた藤の名所佃島の在りし昔をしのぶよすがとしたものであろう。この外にも神社の拝殿及び幣殿に掲げられた数々の額には問屋筋からの奉納が多く，いづれも商売繁昌を祈る商人の心持ちをよく現わしている。

(6) 佃島の宗教――わが国の神社には，仏教の本山末寺と同様に，本社末社の関係にある社殿を境内または境外に造営しているものが少くない。けれども末社のほかに摂社，分社，今宮，枝宮などの用語があって，それらの区別を立てることは困難である。梅園惟朝編　住吉松葉大記[22]を見るとその摂末部八に「摂は摂社也。末は末社也。摂は兼也。本社より兼帯守持するの義也。末社とは本社有縁の諸神を斉祀して，因て其序に配享するの義也」と定義している。けれどもこの定義は必ずしも普遍的ではなく，時代，地方または神社によって異った意味に解され，神官の間においてさえ混用されているようである。従てここではこれらの用語を厳密に区別することなく，慣例にならって用いることにする。佃島住吉神社は，前掲文書によっても明かなように，摂津佃村住吉神社の分社として出発し，神主も大阪平岡氏の分家がこれに当ったのであるが，ここではこれを東京における本社とみなして，その境内及び境外の摂末社との関係を辿ることにする。現在佃島住吉社境内には竜神社（竜王弁財天，文政5，鎮座），船魂神社（文久3）及び入船稲荷神社（明治2）の3社及び疫神社（嘉永3），疱瘡神社（嘉永3）の2小祠，更にもう一つ極めて小さな祠が存在している。これら境内諸社の位置は何れも前述文久3年の住吉社境内絵図面に示されたものとちがっているから明治になってから移動されたものと思われる。現在本社拝殿の左側にある竜神社の起原については第6代神主平岡好貞の書いた竜王弁財天勧請同白木屋奉納（天保10）の文書[23]に詳記されて居り，また好貞はこれを末社と呼んでいる。なおこの弁財天は境内諸社のうちでも参詣者多く，特に泉鏡花が小説の中で佃の弁天に言及して以来，美形の参詣者が激増したという。次に船魂神社についてはまだ依るべき文献に接していないので他日の研究にまつこととする。これに反して入船稲荷神社が大伝馬町1丁目願主太物店中の要請によって明治2年に他から移建されたことは住吉の御社用日記（自明治元年至4年）に明記されている。なお弁財天の奥，舟入堀岸にある疫神社と疱瘡神社はやはり前述住吉社境内絵図面には末社と書かれて居り，何れも悪疫流行を防ぐため，疫神を鎮めやわらげる意味で設けられた小祠である。ただその右側に置かれた極めて小さな祠が何を祭ったものか明かでない。神主の話によると，これは明治以来の大親分として天下に名をとどろかせた金子政吉（佃政）の子分広森弥太郎なるものが大正時代に願い出て自家からこの境内に移した小祠で，獅か何かを祀ったものらしいとのことである。

以上は住吉社境内の諸社であるが，境外社としての分社は深川牡丹町3丁目と月島9丁目とにある。元来佃島は百間四方と云われる程狭小な地域で，漁業の発展につれて必要となる網干し場などが不足してきた。そこで漁師のなかには深川の漁師町へ移動するものも現われてきた。そこは佃島より古い漁師町であったがその一部，表間58間，奥行47間，2,700余坪は「佃島猟師共御成先御用御請御看御用相勤候ニ付，享保四亥年大岡越前守様御懸ニテ惣漁師共へ助成地ニ被下置候，右ニ付地主名前無御座候，右御尋ニ付申上候，以上，亥十一月廿九日　佃島　名主幸右衛門」という寛政3（1791）年の届書[24]の示す如く佃島漁民に貸与され，深川佃町と呼ばれるようになった。また佃島記録[25]の宝暦5（1755）年の記事によるとこの土地は「深川八幡鳥居前通海際佃，右は佃町と申候，尤町方支配場にて御座候，右地面の儀は元来武士方上ケ地に有之候様先年佃島名主并に惣猟師共相願拝借仕候地面にて御座候，然処隠売女出入に付当時上納地に罷成候，以上，依田和泉守」と書かれている。以上二つの文書によって深川佃町の由来は明かにされたが，次にこの佃町と住吉神社との関係が問題になる。まずその手掛りとなるのは東都歳事記[26]に6月28，29日の行事として「佃島住吉明神祭礼今明日修行，神主平岡氏，この日は名越祓と同日の竜虎の頭を渡す，廿九日の未の刻神輿を海中に舁入奉る，今日深川佃町にも遙拝の社ありて祭礼執行あり」と記されている事である。この遙拝の社というのがどのような性質及び形式のものか，今これを知る資料を欠くが，上述歳事記の編まれた後，天保10（1839）年8月に佃町住吉神社新築の完了したこと，またそれ以前の御宮が類焼して仮殿になっていたことは

22) 住吉松葉大記 p. 95　大阪市住吉区住吉町，鈴木松太郎　発行，昭9
23) 平岡家所蔵
24) 前掲佃島年代記 p. 209
25) 佃島記録，慶応義塾図書館所蔵，写本 p. 1
26) 東都歳事記　斎藤幸成著，長谷川雪旦画，半紙本4巻　天保9，巻3 夏の部，p. 32

佃町正遷宮次第という文書[27](天保10年)によって知ることができる。この新社殿普請の後，御遷宮式の行われるまでの間に神主平岡弘貞と深川氏子代表との間に多少の悶着があり，やや遅れたが結局式は弘貞によって行われた。これらの事情について同文書には次の如く書かれてある，「一，佃町御宮御普請，鳥居，手水鉢，同家根とも不残新キに相成候，尤今般御宮相建候地所の儀は是迄池にして廻りに藤の古木有り，右の地所を土もり地行築立御宮建，一，佃町御宮類焼後は仮殿に相成居是迄北向に候，今般御造営御普請東向に建て候事，　佃町世話人湊屋儀兵衛」と。

大正12年の大震災頃まで佃町（現在は牡丹町）と呼ばれていたこの地域には佃島から移動した漁師の住む70戸内外の家があった。また昭和2年の調べによるとこの町の住吉神社は無格社（公認された神社のうちで縣社，村社などの社格のないもの）で，住吉3神を祭り，氏子20人と記録[28]されている。私は最近2回宮家，山岸，米地の3研究者と共に現地を視察したが，小じんまりとした木造住吉造りの小祠が長方形の狭い境内の東南端に設けられ，また入口の石柱は鰹節問屋初山半三郎その他の奉納者名を刻んだ石柱列によって支えられていた。しかもこのように小さな祠の境内にすら中央左側塀添いに車折神社という石造小祠の存在するのが注目を引いた。立札によるとこの祠は「高倉天皇の御世の学者清原頼業を祀る京都嵯峨の車折神社の分社にして，昔より商人がこの神社の御神石を持ち帰り家に納め満願の際石数を倍にしてこの社に返し商売繁昌を祈るときは商売買の価の異変なき慣のある神社なり」とのことである。試に正面両開扉の中を見ると奉納者の住所氏名を墨書した約6cm大の小石が沢山に詰め込んであった。このように一つの神社境内に幾つかの摂社，末社などが鎮座し，それぞれ崇敬者によって信仰されているのはまことに面白い現象であって神社の社格，本末の関係や国民の多神教的傾向など，宗教社会学上研究すべき課題を供している。

私はまた他の研究者と共に2回ほど月島9丁目大通に面した住吉神社と御旅所なるものとを見学した，この神社は佃島本社の境外分社であり，またその前庭右側にある33間堂のような長い間口をもつ御旅所（明治33年初建）は本社大祭の折，神輿の一夜宿泊する所で，大きな神輿五台を並べ収めてもなお余りある程の広さの立派な建物である。昭和37年の佃島住吉神社大祭行事次第を見ると神輿巡行の様子がよくわかる。参考のためその次第を次に示す。

8月5日　午前5時朝神饌献供，午前8時30分大祭式
同10時各町神輿勢揃，10時30分出発，午後9時神輿神璽奉遷式
8月6日　午前5時朝神饌献供，8時30分本社神輿出社，9時御座船に移す，11時まで水上巡行して上陸，正午小休祭典，午後1時より6時まで佃島巡行，それより月島御旅所へ直行し，同所にて夕の祭典，後一泊
8月7日　午前5時朝神饌献供，午前6時30分神輿御旅所出発，正午月島小休祭，午後6時新佃島小休祭，午後6時30分本社にて還座祭，以上

大祭は4年に1度行われ，その第1日目には各氏子の住む町々の神輿が多数佃島に勢揃し，また大小6対の獅子頭の巡行がある。東都歳事記に竜虎の頭を渡すとあったのはこの事である。まず拝殿に飾られた獅子頭を世話人が一対ずつ社前に舁ぎ出すと大川の岸から正面冠木門にかけて待期していたそろいの浴衣に白足袋の若衆が合図と共に殺到，われ勝ちに走り寄って獅子の鼻づらにさわろうと争う。その有様はまことにすさまじく，そのため境内の石造御神灯の一つが倒されてしまったほどである。これは鼻づらに早くさわると縁起がよいとされているからである。ひとしきりこの危険なもみ合いが終ると10人内外の若者が獅子頭とその長い萌黄色胴布の中にはいり，鳶職の木遣を先頭に町内をねり歩き，時々獅子舞を演ずる。2日目に行われる本社神輿（八角形の豪奢なもので天保5年製という）の海中渡御は昔から有名なものであったが今は御座船にのせ，佃ばやしの船を先頭に供奉船をつらねて佃島，月島，晴海町など氏子の住む地域の河川を一巡するのである。住吉の御祭りは佃島住民にとって最も楽しいものであり，島の古老に聞いても子供の時分からこれほど思い出の深い楽しみはないと云う。外来者たる私でも地上地下各1.8mもある太い立派な角材の枠に支えられた18mほどの高い棹にはためく大幟（白布に黒く住吉大明神の文字を染めぬいたもの），街路わき処々に仮設されたよしず張りの小屋（そこには住吉の裏紋髪鶴の模様を染めた幕を張りめぐらし，一対の獅子頭を安置してある），境内神楽殿や川岸に仮設されたやぐらなどから響く佃ばやし等々に接したときは，他では味えない独特の佃島情緒を満喫したように感じた。なお島内6ヵ所に立つ大幟には明治22年と日附の染めぬいたものもあって保存のよいのに感心した。広重の「佃島住吉の祭」にも描かれたこの種の幟は信州諏訪大社御柱祭のときあちこちの摂末社に立てられる幟と非常によく似ている。

27) 平岡家所蔵
28) 前掲，住吉大神御鎮座地 p. 2

佃島住吉社についての記述はこれで一応打ち切るが，序に昭和2年現在の全国住吉神社とその摂末社との社数のうち東京，大阪及び日本全体の分を第1表で示しておく。

第 1 表

	官	幣	社	国	幣	社	府県社	郷 社	村 社	無格社	摂末社	計
東京	0	0	0	0	0	0	0	2	9	4	10	25
大阪	1	0	0	0	0	0	3	13	65	2	74	158
全国	3	1	1	1	2	1	41	154	965	460	510	2,139

なお佃島住吉神社は元禄 12 (1699) 年に古蹟社の指定をうけ，明治5年11月に村社，同6年7月に郷社に昇格したが終戦後は全国の神社と共に社格を廃止された。

佃島住民の過去及び現在の宗教についてはいずれ宗教専門の共同研究者による調査結果の報告がなされると思うが，少くとも過去の永い年月にわたり住民は何れも住吉明神の氏子であると共に「島中はなまぐさいはず門徒宗」という川柳でもわかるように殆ど全部本願寺築地別院所属の仏教徒であった。別院と佃島住民との関係は既に幾つかの文献が詳しく伝えて居り，また金子太三弥(為雄)著　砂払　初号（昭和7年12月）に要領よくまとめて書いてあるので，ここでは「築地別院上地ニ対シ下附願指令書」[29] の写本と築地別院史[30] とによって簡単な説明を加える。まず写本は明治9年7月23日東京府社寺掛からの召喚に応じて佃島の地主森幸右衛門が上申した書類の内容を示したもので本願寺敷地成立の由来をつぶさに述べている。即ち「西本願寺ノ儀ハ往古浜町ニ在リテ明暦三年大火ノ節類焼，其際転寺被仰渡候処，私祖先忠兵衛儀当時拝領葭生地ヲ以テ本願寺替地ニ相願候処，速ニ願ノ通被仰渡候ニ付，京都本願寺本山ヨリ該葭生地埋立工事ノ儀依頼相成候ニ付佃島門徒一同ヘ申諭シ，年月ヲ経漸ク築造竣功致シ，寺院堂塔ヲ建築シテ築地本願寺ト称シ候儀ニ御座候，私祖先忠兵衛儀ハ摂州西成郡佃村出身ニシテ森孫右衛門実子世々同村ノ庄屋ニシテ本願寺直参門徒ニ御座候」「慶長十七年七月徳川将軍殿下江戸御在城ニ付可相越旨老中土井大炊頭，安藤対馬守殿ヨリ上意ノ趣被仰渡候ニ付漁師共召連同年八月御当地ヘ着，老中安藤対馬守殿邸内，即チ浜町邸ニ罷在候其後右葭生地幷ニ鉄砲洲向干潟ノ地共拝領仕自築ノ上佃島ト称シ住居罷在候，前書大火ノ節本願寺替地ニ奉願書面ノ通御座候」とある。また同写本には築地本願寺住職大谷光尊代理長谷川楚教が「……明暦年間当地ニ起立以来一山四ケ度火災ニ罹リ旧記書類悉皆焼失仕候得共一昨年来追々申立置候通リ祖先良如自費ヲ以テ塡海築立候次第ハ別紙写ノ通リ当寺伝写ノ旧記中ニ御座候，就テハ自築ノ節当時佃島ノ檀家ノ者最モ功労有之候ハ右檀家ノ者惣代証印為致候条事実御詮儀ノ上速ニ昨年八月中奉願候通寺院地外ト御定相成候地所無代価地券御下渡被成下度此段奉願候也，明治九年七月十九日」と書いている。これらの文書は森幸右衛門，同後見高島謹司，佃宇右衛門及び本願寺住職代理らが東京府権知事楠本正隆に上申したものであって，本願寺と佃島住民との関係を明かにしている。

このように本願寺が築地に移転するに当って海上 181 m² の場所を埋立てるに大功のあったのは佃島の漁民であり彼等は「全部本願寺の信徒であったから，這度御坊が八丁堀の海上を埋立て移転するに当っては熱心にその工事に従事した。この功によって爾来佃島の門徒は当別院と深い関係をもち，御茶所番人，墓地選定，墓守，非常時及び法要時の出役等には必ずこの佃島門徒の掌るところとなって今日に及ぶ」[31] と記録されている。築地移転後も本願寺は天明4，天保5，明治5，同6の各年に炎上しており，また大正12年の震火災にも堂宇を失ってしまった。その後昭和10年には3ヶ年の日時を要した鉄筋コンクリート造印度仏教式の現存伽藍が完成したのであるが，これより先同地の墓地移転の計画を立て昭和5年に現在の杉並区和泉町の和田堀廟所を設け，築地にあった佃島門徒の墓もすべてここに移した。閑静で広闊な墓地で最も注目を引くのは南無阿弥陀仏と大きく刻んだ石柱とその下の壇に無縁塔と横に書かれた巨大な墓である。これこそは昭和7年3月に佃政親分が築地にあった多くの佃島出身者の無縁の遺骨をまとめて葬ったものである。そして佃政自身の墓は金子家先祖の墓とならべて彼の生前建てたものであり，昭和9年3月9日の死と共にここに埋葬されている。金子家の広い墓所の裏手には佃島の折原家，丸長，その他多くの墓が列をなして，あた

29) この写本は森家から細川重右衛門に寄贈されたもので現在は平賀家所蔵

30) 築地別院史　藤音得忍編　本願寺築地別院発行，昭 12.

31) 前掲　築地別院史 p. 64

かも佃島住民の墓地であるが如くに並んでいる。附近にある樋口(一葉)家の墓も一代の俠客佃政の勢力に圧せられているの観がある。

わが国切支丹の普及は封建時代の為政者にとって容易ならぬ問題であった。江戸に切支丹禁制事務所としての切支丹屋敷（井上筑後守政重の下屋敷）の設けられたのは寛永 17 (1640) 年であったが，切支丹宗門改は佃島住民に対しても行われた。下記の覚書[32]はその筆者と年月が記入されていないので時代を明かにすることはできないが住吉社神主の提出した文書の写しまたは下書であることは間違いない。「覚，一，切支丹宗門従前々無解怠今以相改候，先年被仰出候御法度書之趣遂詮議候，住吉社支配下社人，門前町家，私家来下々等に至迄切支丹に紛敷者無御座候，依之銘々寺証文書置申候事，一，此以後支配下社人，門前町家，私家来下々等に至迄切支丹に紛敷者御座候ば早速可申上候，為念仍如件」。この文書中注意すべきは寺証文書置申候ということで，佃島住民が住吉明神の氏子ではあっても信仰の上では檀那寺からその人が檀家であることを証明する寺証文によって切支丹でないことを示したという点，また社人，門前町家，私家来下々等という区別の仕方である。社人は住吉明神に奉仕する神官，神職及びその補助者，或は社役人と称されるもので，必ずしも佃島住人ではない。祭礼の折，他から来援参加するものもあろう。次に門前町家は佃島在住の氏子，家来下々は神主家の家事使用人ではないかと思う。要するにこの文書は切支丹宗門改として江戸寺社奉行の宗教取締の一面を示すと共に，佃島住民に対する神主の社会的地位と役割を暗示するものとしてよき参考資料となる。

(7)　**文化史上の佃島**——300 余年来の漁村で，漁師以外の住民の殆どいなかった佃島に学者や芸術家などの輩出しなかったのはむしろ当然である。それにここは常に無医町であった。ただ明治30年前後に開業医中山直一が島の住人折原初太郎の勧誘に応じて数年間在住したが，間もなく月島に移転してしまったという。学者としては住吉社歴代神主が挙げられるに過ぎない。中でも第10代平岡好文は典故考証と実地の経験に富み，皇典講究所講師として，また典故考証雑式典範[33]の著者として斯学の権威者であった。また父好文と同様東京帝国大学卒業の第11代平岡好文が英文学者であり，もと慶応大学教授として令名の高かったことも周知の事実である。同様にも

32) 平岡家所蔵

33) 平岡好文著，平岡好道編，典故考証雑式典範，昭 31，増補，昭 36，京文社

と立教大学教授の英文学者故久保田正次も生え抜きの佃島っ子であった。他方文人としては五世川柳が，その流れを汲む平岡平左衛門と同じく，島の人であったことも忘れてはならない。この外に芸能方面では長唄の笛，大鼓の名人，また佃ばやし，佃の盆踊りなどに優れた人々も出ている。佃の盆踊りについては「盆踊りむかしは江戸市中にも行はれしが，久しく絶えてなし。唯佃町のみに猶その古風を存し，今に至るまで特許を得て之を行へり。蓋し摂津国佃村より伝へ来りし縁故あるに由る。毎年七月十三日より十六日まで毎夕之を始め，十一時を以て終るものとす。甚だめずらしき事なれば，参観する者亦多し」と明治 34 年の新選東京名所図会[34]は伝えている。今でこそ東京の町々でもレコードの東京音頭その他の騒々しい機械音とめちゃめちゃに叩く大太鼓に合せた盆踊りが盛に行われているが，明治，大正には佃島に行かなければ盆踊りなるものが殆ど見られなかったのであろう。これ以外の島の行事としては 1 月17日の白魚祭りが面白い。参加者は 7 艘の和船に分乗して大川を下り品川沖に進む。神主の乗る主船の舳先には絶えず柄杓で御神酒を河海に流す人，三つ重ねた四斗樽の上で狐の面をかぶって踊る人，笛，鉦，太鼓など賑かに奏する佃ばやしの人々などがいて，いかにも水神祭，御神酒流しなどとも呼ばれるこの祭にふさわしい情景を呈する。白魚のとれない現今では沖合の海苔の粗朶に近づき，そこに立てられた松の木の前に船を整列させ，神主の読む祝詞と共に参加者一同海神に祈りを捧げるのである。この儀式は海苔祭りとも呼ばれるようになってしまったが，白魚の無数にとれた時代の白魚祭を経験した島の人々にとっては定めて物足りない感じがするであろう。

他方住吉神社の境内では正面冠木門の両開扉に薄浮彫された髪鷲[35]，水屋欄間を飾る透木彫，神楽殿左右両翼にはめ込まれた獅子の子落しを描いた古い透木彫，鳥居の陶製懸額，拝殿内の諸懸額など少し注意してみるとそれぞれ捨て難い，味うべき作品が少からず存在する。けれども佃島の文化を構成するものには島の住民の所産ではなく，外部の人々の築いたものが多い。しかもそれらの詩歌，随筆，絵画など外来者の作にも共通する特徴は何れも極めて庶民的趣味の横溢している点にある。今こ

34) 新選東京名所図会，風俗画報編，東陽堂 明治 29—44

35) 佃島漁師は昔空飛ぶ鷲の飛翔状態によって天候や，火災を予知した。そのため鷲は住吉神社の裏紋として図案化された。なお神社の正紋は住吉 3 神を象徴する 3 つ星である。

こで佃島文化全般に言及する余裕はないので次に佃ばやしと錦絵について少しく触れておく。

古くからその名を喧伝され，また近頃とみに注目を引いている佃ばやしは住吉の大，例祭，盆踊り，白魚祭り，その他の行事の際には誰れでもこれを聞くことができる。これこそは島の誰れもが愛好し，何よりも永存を望む鳴りものであって，現に月島第1中学校の生徒のうちにさえ，これが保存をはかる佃ばやし研究会を結成せしめたほどである。同校教諭笹川昭二先生は佃ばやしの起原を摂州田蓑神社に古くから伝えられていた「つくだけやりばやし」[36]に求め，摂津佃村漁民江戸下降の折，このお囃子に用いる諸道具を持参したという事実を考慮に入れてそれには江戸ばやし，葛西ばやし，神田ばやしなどとは多少ちがった大阪風の特徴が入り込んでいるのではないかと推定している。私もこれまで数回佃ばやしの現場観察をしたが，大太鼓，小太鼓，鉦（よすけ），笛などの楽器によってかなでられる素朴で，しかも賑かに，活気のみちた諸調には佃島の人々だけでなく，外来者にとっても不思議な魅力がある。その道の名人の益々減じつつある今日，研究と実演に力を注ぐ月島第1中学生徒今後の業績が期待される。

佃島またはその附近の情景を画題とした錦絵はかなり多い，広重の佃島之郭公，佃島住吉の祭，永代橋佃島，北斎の佃島住吉恵方，武陽佃島などはその代表的作品として広く鑑賞されている。この外にも北寿の佃島，国芳の東都名所佃島，佃沖晴天の富士，英泉の佃沖之図，豊広の江戸八景佃島帰帆その他数十に及ぶ。けれどもここで特に言及したいのは "Rising Sun and Tsukuda Island seen beneath Eitai Bridge on New Year's Morning" と英訳画題のついた歌麿の多色刷版画（22½×19¼）である。これは1955年3月10日から4月17日まで The Art Institute of Chicago が開催した Masterpieces of Japanese Prints の展覧会に展示されたものであるが，私は浮世絵研究の美術史学者渋井清所有のこの展覧会説明書に挿画として載せられたものを見て全く驚いた。こんな大胆な，また奇抜な構図，しかもそれが「女絵最大の巨匠」[37]といわれる歌麿の作だというので一層びっくりした。四本の太い円柱橋脚だけで永代橋を表現し，そのすぐ背後に緑樹に覆われた佃島と帆柱の林立する漁船を画き，また遠く彼方の水平線上には点在する白帆と，元旦の日の出をあざやかに力強く示している。広重の永代橋佃の漁船，永代橋佃島，あるいは国芳の東都名所佃島など，永代橋をその橋脚だけで表現し，橋脚と橋脚の間に見える佃島を描いた版画は他にもあるが，歌麿のこの絵は更に着想がすばらしく，むしろ人の意表をつくものがある。なお四本の円柱橋脚には狂歌師仲間の詠んだ2首ずつの歌が書かれている。そのうち四方赤良の「はる霞たつやいづこさん橋に舟もつくだのみなれ棹姫」と宿屋飯盛の「えいさつさえいたい橋をさしていま春のひきやくのけさつくだ沖」の2首は何れも佃島をよみ込んだものとして面白い。こんな歌を橋脚に書きつらねたところにも渋井清のいわゆる「根っからの庶民」としての歌麿の一面，また佃島文化の庶民性が窺われる。

(8) 佃島と月島――明治5年から佃島と石川島とを合せて佃島と呼ぶことになったので，石川島の名は一応無くなったのである。けれども事実上は今でも両者を分けてそれぞれ別地域と見なす人が少くない。文禄4(1595)年の絵図[38]に向島とあるのが後の佃島，また此島無人島とし，森島または鎧島というと書かれているのが後の石川島である。この無人島は寛永の頃旗本石川八衛門重次に与えられ，その子孫がここに住んでいたので石川島と通称されるようになった。やがて石川氏は寛政3(1791)年，代地を賜って麹町永田町に移転し，その後石川島には人足寄場が置かれ，更に今三井倉庫のある場所は徒刑所，懲役場，監獄署などの所在地となって明治28年まで囚人の姿が佃島からよく見えたと云われている。人足寄場は当時の地図にもその位置が明記されているが，これは入墨，叩きなどの軽罪者で既に処刑はすんでも引取人がなかったり，再犯の恐れのあるものを人足として使役するために設けられた一種の留置場であった。人足は7室（1室40人位）に分れて住み，細工小屋で大工，建具，指物，塗師などそれぞれの仕事を行い，また手に職のないものは米つき，油絞り，たどん作りなどの作業をさせられた。従てここは一種の授産所のようなものとなり，簡単な手工業の行われるところとなったのである。他方嘉永6(1853)年に M. C. Perry が浦賀に来航し，開港を迫ったとき，幕府は過去218年間固守してきた大船（500トン以上）建造禁止令を解いて，本邦最初の洋式造船所を人足寄場の西側広場に設けた。これこそは現在の石川島重工業株式会社[39]の前身であって，そ

36) 佃ばやし研究資料，p. 2　中央区月島第1中学校佃ばやし研究会，昭 37

37) 渋井清，(評伝) 忍岡哥麿，美術手帳4月号，昭 33

38) この絵図の実物をまだ見ないが写真は平岡家にある。なおこの図の年代については検討を要する。

39) 石川島重工業株式会社108年史，p. 176 ff. 同社社史編さん委員会編，昭 36

れ以来石川島は後の月島工業地帯発展の先駆地となり軍事的，産業的意義の深いところとなった。これに反して隣接の佃島がいつまでも漁師町として，また非工業的，前近代的小地域社会として存続したのは石川島と著しい対照をなしていた。

さて佃島と石川島とは後の広大な月島埋立地域成立の拠点となり，その前身地と云われている。かくて現在では佃島（石川島を含む），月島（第 1，2，3，4 号埋立地）及び新佃島を合せて月島[40]と総称することもある。それならば今なお隅田川と旧舟入堀とで囲まれたわずか 200 m² の小天地をなす佃島（佃小橋で結ばれる旧佃島東町をも含む）の南西海上に出現したあの尨大な月島はいつ，どのような順序で埋立を完成したのであろうか。第 2 表[41]によって成立の順序と各埋立地の面積を明かにしよう。

第 2 表

埋立地	面積	完成年月日
月島地先埋立地（1 号地）	517,612 m²	明 25.12.26
月島埋立地（2 号地）	427,588	27.10.27
佃島地先埋立地（新佃島）	197,750	29. 9.11
月島地先埋立地（3 号地）	278,009	大 2. 5.27
月島東南地区埋立地（4 号地 晴海地区）	911,020	昭 6. 7.

明治18年埋立工事開始以来長年月を経て完成した月島大埋立地は合計 299万m² に及び，中央区総面積 965万m² の約30%に当る。このような大きな陸地の出現は日露戦争とその後の産業に於ける急激な発展，その他の事情に応ずるものであったが，それはまたこの地域への機械工，造船工，その他大量工業人口の吸収を可能ならしめた。これに比べて佃島は「江戸の図に点を打ったる佃島」とか，「一声であまる佃のほととぎす」と表現された通り今でも面積は狭く，人家は櫛比して，他からの人口移入を殆ど許さない有様である。第 3 表をみても過去 3 回の国勢調査に於て世帯及び人口の数に大した変化のないことがわかる。

けれども月島の町々は何れも埋立完了後新しく生れたものであるから，そこに氏神を祀る神社などあるはずはなかった。従て最広義の月島に在る唯一の神社たる佃島

40) 前掲，月島発展史，凡例

41) 月島警察署五十年の歩み，p. 44 の記事を表にまとめた。月島警察署五十周年記念出版会編 昭 36

第 3 表

面積	昭和 10				昭和 25			
	世帯	男	女	計	世帯	男	女	計
0.2617km	422	939	936	1,875	433	895	906	1,801

面積	昭和 30			
	世帯	男	女	計
0.2617km	430	969	960	1,929

住吉神社は自然に月島の 1，2，3，4 号地及び新佃島などの移入住民を吸収して氏子とするようになった。かくて昭和 2 年には氏子数 7,000 人[42]と算定されたが，現在の数字がどれくらいに増加しているかまだ調査する機を得ていない。地元の佃島町会の住吉神社に対する関心と責任は依然として深く，重いものではあろうが，月島，新佃島などの各町会代表者を加えて合議の上神社の祭礼その他の行事と費用を決定するのであるから，現行制度の運用いかんによってどんな変化が今後の祭礼などに生ずるか，予断を許さない。これまた佃島将来の変貌に大きな関係をもつものではないかと思われる。

(9) 行政上の佃島――佃島は現在中央区所属の一つの町である。しかしその行政上の帰属は長い間にいろいろ変化してきた。佃島住吉神社が西成郡住吉神社の分社であり，神主もまた西成郡神主の分家であることを示した前掲の文書を見ると寛政 8 年に佃島は武州豊島郡に含められている。当時佃島が江戸町奉行の支配下にあったことは明かであるが，それ以前のことは調査未了で今は触れることができない。下って明治 2 年 3 月16日に東京府 1,686 の町々が整理され，50番組に分けられたとき，佃島は霊岸島各町その他と共に第 7 番組に編入され，従来の名主森幸右衛門はこの番組の添年寄となった。更に明治 2 年11月，東京市内を 6 大区47小区に分けたとき，佃島は近隣諸町と共に第 3 区 5 小区に属した。次に京橋，日本橋の地域が第 1 区に編入される改革の行われたとき佃島はそのうちの第10小区に入った。本願寺と佃島との関係を述べたとき引用した前掲明治 9 年 7 月の上申書に第 1 大区10小区佃島23番地主，森幸右衛門と書いてあったのを見てもこのことは明かである。しかしこの大区小区制は明治11年 7 月に廃止され，府下郡区の新名称と区域が決定された。

42) 前掲，住吉大神御鎮在地 p. 2

耿麿筆　永代橋下から見た元旦の日の出と佃島
（シカゴ美術研究所所蔵）

日本橋区と京橋区の誕生はこの時であって，佃島は京橋区154の町々の一つとなった。それ以来久しく京橋区佃島として親しまれていたが，昭和18年7月1日都制が実施されて東京市の名は廃止された。やがて終戦後の昭和22年3月15日には従来の35区の地域と区名が統合整理されるに及んで佃島は従来の日本橋京橋の両区を合せて成立した中央区のうちに含まれて今日に及んでいる。

(10) 佃島住民についての若干の統計——佃島の現状を知るため既に若干の調査を試み，その結果を目下集計しているが，これまでに一応明かにされた数を統計表にして次に示すことにする。そのうち第6及び10表を除き他は何れも昭和37年4月現在の住民票[43]を資料とした集計であるから，未登録者の数は欠けている。

まず第4表は生れ年を標準としての男女別人口で，これによると人口1,762名のうち明治生れが20%，大正が

第4表　佃　島　住　民

生年別人口（昭和37年4月現在）

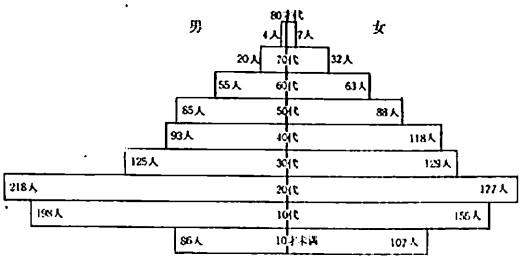
生年		男	女	計
明治	8	0	1	1
	9	0	1	1
	12	1	1	2
	13	0	1	1
	14	2	1	3
	15	1	2	3
	17	1	2	3
	18	2	2	4
	19	2	4	6
	20	1	2	3
	21	2	5	7
	22	4	5	9
	23	2	4	6
	24	2	6	8
	25	4	2	6
	26	1	7	8
	27	6	5	11
	28	4	3	7
	29	8	5	12
	30	9	3	12
	31	6	11	17
	32	6	4	10
	33	5	11	16
	34	4	11	15
	35	6	4	10
	36	4	9	13
	37	6	8	14
	38	5	11	16
	39	9	3	11
	40	9	10	19
	41	8	6	24
	42	15	8	23
	43	11	8	19
	44	13	12	25
計		164	188	352
大正	1	9	13	22
	2	8	20	28
	3	6	14	20
	4	7	14	21
	5	8	9	17
	6	10	7	17
	7	10	14	24
	8	14	9	23
	9	11	13	24
	10	6	11	17
	11	9	7	16
	12	4	9	13
	13	7	12	19
	14	10	9	19
計		133	169	302
昭和	1	19	19	38
	2	11	13	24
	3	16	12	28
	4	13	13	26
	5	17	12	29
	6	13	19	31
	7	15	11	26
	8	19	17	36
	9	20	17	37
	10	24	17	41
	11	18	6	24
	12	25	14	39
	13	25	20	45
	14	24	15	42
	15	18	20	38
	16	20	24	44
	17	22	27	49

43) 山中一郎指導の下に科学警察研究所の行った調査に慶大助手宮家準，山岸健をはじめ同大学の佐原ゼミ，中井ゼミ所属の学生多数が参加して住民票に基く佃島住民の個票を作った。

生　　年	男	女	計
昭和　18	27	18	45
19	23	16	39
20	14	16	30
21	21	16	14
22	25	12	37
23	27	17	44
24	24	18	42
25	14	14	28
26	17	15	32
27	11	15	26
28	7	11	18
29	8	17	25
30	15	11	26
31	9	9	15
32	7	17	20
33	9	12	21
34	12	10	22
35	4	4	11
36	12	13	25
37	3	3	6
計	587	519	1,106
総　計	884	876	1,760
不　明			2
			1,762

17%強，昭和が62%強となる。次に第5表年令別人口の70才，80才以上と第6表の高令者表との間にわずかの相異がある。第6表は昭和37年10月25日佃島敬老会に招待された70才以上住民の名簿に依って作ったもので，あるいはその人々のうちに住民登録のしていないものがある

第5表　年令（10 才階級）別人口
（昭和37年4月現在）



男　計　884 人　　女　計　876 人
人口総計　1,760 人＋不明 2

第6表　佃　島　高　齢　者
生年及び年齢別人口

生　　年	年　令	男	女	計
明治　8	87	0	1	1
9	86	0	1	1
12	83	0	2	2
14	81	2	1	3
15	80	1	1	2
16	79	1	0	1
17	78	1	1	2
18	77	2	3	5
19	76	2	4	6
20	75	1	3	4
21	74	2	4	6
22	73	4	3	7
23	72	1	4	5
24	71	1	6	7
25	70	3	3	6
計		21	37	58

ため誤差が生じたのではないかと思う。第7表の番地には欠番がある。それは，例えば，戦争中強制疎開によって家屋を取壊し，道路を拡張したため，そこの番地がな

第7表　佃　島　同　番　地　内
世帯数及び人口（昭 37.4 現在）

番　地	世帯数	人　口		
		男	女	計
1	43	91	77	168
2	7	11	15	26
3	11	21	26	47
4	5	7	7	14
5	10	20	21	41
6	11	23	23	46
7	10	16	20	36
8	8	13	15	28
9	16	35	33	68
10	12	26	19	45
11	2	3	7	10
12	6	12	10	22
13	9	13	15	28
14	5	8	13	21
15	25	27	30	57
16	10	10	12	22
17	12	33	35	68

番地	世帯数	人口		
		男	女	計
19	5	8	4	12
20	3	7	11	18
21	11	17	18	35
22	9	16	20	36
23	15	21	21	42
24	5	13	14	27
25	12	24	18	42
28	19	31	34	65
30	9	19	21	40
31	6	15	14	29
32	11	12	13	25
33	9	18	24	42
34	6	11	9	20
35	8	12	14	26
36	8	17	21	38
37	10	14	14	28
38	7	11	9	20
39	9	21	14	35
40	9	12	14	26
41	8	13	15	28
42	9	16	15	31
43	4	12	7	19
45	2	2	3	5
46	2	3	5	8
47	14	23	33	56
48	30	60	51	111
50	40	74	72	146
57	3	2	3	5
計	492	873	889	1,762

くなったことにもよる。第8表の世帯主年代をみると第4表の場合とはちがって，明治41%，大正27%と上昇し，昭和は33%に下降する。これによっても明治生れの人々の重きをなしている世帯のまだ少くないことがわか

第8表 番地別世帯主年代

(昭 37.4. 現在)

番地	明治生	大正生	昭和生
	世帯主数		
1	22	10	11
2	5	0	2
3	4	3	4
4	1	0	4
5	3	4	3
6	5	5	1
7	3	3	4
8	6	2	0
9	5	8	3
10	6	2	4
11	1	1	0
12	4	1	1
13	4	3	2
14	4	1	0
15	6	5	14
16	3	5	2
17	4	6	1
19	2	0	3
20	2	1	0
21	7	2	2
22	3	2	4
23	6	2	7
24	3	2	0
25	6	2	4
28	5	4	10
30	1	1	7
31	2	1	3
32	4	3	4
33	5	3	1
34	4	2	0
35	3	4	1
36	4	3	1
37	6	0	4
38	3	2	1
39	4	2	3
40	5	2	2
41	3	4	0
42	5	2	1
43	3	0	1
45	1	0	1
46	1	1	0
47	5	7	2
48	7	11	16
50	12	11	17
57	2	1	0
計	200	134	152
	不明 6		
	合計 492		

る，第9表は住民票によって明かにされた世帯主の本籍地である。世帯主全体の50%が佃島を本籍としているが，本籍移動容易の今日，この50%という比率をみて直ちにその大部分を佃島生え抜きの永住者と断言することはできない。今後の調査によってこの点を追究したいと思う。反対に他府県からの転入者で，なお佃島に本籍を移していないものが31%あるのは，都内の他の諸地域の場合と同様に，佃島でも転出入増加の傾向を示すものと云えるであろう。

第9表　佃島世帯主本籍地

(昭 37.4 現在)

本籍地	世帯主数
中央区佃島	244
佃島以外の都内	83
都下	1
他府県	146
内 千葉	17
茨城	14
新潟	12
群馬，福島	各 11
秋田	8
埼玉，宮城，北海道，静岡	各 6
神奈川，岩手	各 5
山形，島根	各 4
栃木，長野，山口，長崎	各 3
青森，和歌山，高知，鹿児島	各 2
愛知，石川，大阪，京都，兵庫，岡山，香川，福岡，熊本，佐賀，宮崎	各 1

最後に佃島住民中有職者の種類，性質，評価をはじめ職業意識，転職その他については今後の調査研究にまたなければならないが，ここでは科学警察研究所の山中一郎が単独に調べた昭和37年8月現在の資料を借りて集計を試み，第10表にまとめてみた。この表で第1に注目すべきは事務職業者が特に多く39.5%を示していることである。かつての漁師町佃島も今では都内他の地域と同様に会社関係事務員の多く住むところとなってきた。なおここで保安業としてあるのは警察官と消防署員であり，その比率は極めて低い。また販売業者のうち118名が屋外販売者としてあるが，そのうち110名は中央市場の魚仲買及びその関係者，魚行商などである。この数に海苔採培を業としている漁業者を加えると121人となるが，これが佃島に於ける最広義の漁業関係者となるわけである。そしてそれは有職者全体の18.9%となるが，この比率は他の地域に比べれば相当に高いのであって，ここになお佃島らしい特色の一つが残っている。他方専門的職業者の少いのもこの島の昔からの傾向であるが，男では神主，ギター教師，学校教員，作家各1人。女では学校教員2名が現在住んでいる。またサービス業には司会者，理髪師，美容師，下宿業，コック，浴場業などが含まれている。

第10表　佃島住民の職業

(昭 37.8 現在)

	男	女	計	有職者全体に対する%
I 専門的職業	4	3	7	1.1%
専門業者	4	3	7	
II 管理的職業	15	0	15	2.3
企業管理者	15	0	15	
III 事務的職業	177	75	252	39.5
事務員	174	75	149	
保安業者	3	0	3	
IV 販売的職業	172	35	207	32.4
商店主	34	2	36	
商店員	23	19	42	
屋外販売者	111	7	118	
サービス業者	4	7	11	
V 生産工程従業者	81	15	96	15.1
特殊技能工	18	2	20	
生産工程従事者	56	13	69	
運輸業者	7	0	7	
VI 職人	24	7	31	4.9
VII 単純労働者	15	4	19	3.0
IX 漁業者	11	0	11	1.7
計	499	139	638	100

人口 1,762 に対する有職者 638 の % は 36.2
男人口 873 ……男有職者 499 の % は 57.2
女人口 889 ……女有職者 139 の % は 15.6
屋外販売者のうち漁業関係者 110 / 漁業者 11 } 121 と有職者全体 (638) との % は 18.9

(昭 37.12.15)

(この報告は昭和36年度慶応義塾学事振興資金を受けて行った研究の一部である。またこの調査研究に対し格別の御配慮を賜った平岡好道，小沢長吉，飯田栄太郎，細川きみ，飯田きみ(以上佃島在住)渋井清，金子為雄，加藤喜三郎の諸氏に深甚の謝意を表する。)